



特集

ラオス 地域を越えた挑戦

～日本の自治体とラオスの村落で培った地域づくりの道～

ラオスからの報告

地域を越えた挑戦

日本の自治体とラオスの村落で培った地域づくりの道



ISAPHラオス 石塚 貴章



目指すのは、地域を越えた住民主体の地域づくり。この考え方は日本とラオスでの経験を通じて培ってきました。現地の人々は「地域をより良くしたい」という思いと行動力を持っています。地域が抱える課題を解決する時、外部からの支援はあくまで一つのきっかけに過ぎません。最も重要なのは、当事者が立ち上がり、住みやすい社会を作り上げていくプロセスです。そのプロセスに住民がしっかり参加できるように貢献することが、私の役割だと考えています。

この考えは、晏陽初の詩「Go to the People」にも通じています。現地のニーズに基づき、人々の力を引き出し、「自分たちが成し遂げた」と誇りに思ってもらえるような支援を目指しています。



住民主体の地域づくりを体現

地域を越えた挑戦のはじまり

地方自治体の職員としてキャリアをスタートし、栃木県野木町で地域づくりに携わる中で、住民との話し合いを重ねることで地域を活性化するノウハウを学ぶことができました。その過程で培われたのが、「地域の課題は地域住民が解決する」という考え方です。過疎化や経済停滞といった課題に挑む中で、地域が持つ資源を活用する方法を模索しました。この経験は、後にラオスでの村落開発に生かすことができました。

人々の中へ Go to the people

人々の中へ行き

人々と共に住み

人々を愛し

人々から学びなさい

人々が知っていることから始め

人々が持っているものの上に築きなさい

しかし、本当にすぐれた指導者が

仕事をしたときには

その仕事が完成したとき

人々はこう言うでしょう

「我々がこれをやったのだ」と

——晏陽初——

JICA 海外協力隊として村落開発で得た気づき

ラオスの村落で活動する機会を得た私に課されたテーマは、経済的に困窮する住民が自立した生活を送れるよう支援することでした。異なる文化や価値観であっても、自分の地域をより良くしたいと願う気持ちは共通であり、彼らにはその力が備わっていました。住民との対話を通じて信頼を築き、現地の資源である「陶器」に注目しました。陶器を特産品化し、住民が自ら生計を立てられる仕組みを整えました。人々が自信を持って自らの力で課題を解決したと感ずる達成感を得ることが大切だと考えています。この考え方は、後のISAPHの活動にも役立っています。



ラオスの伝統的な陶器を特産品化 (JICA 海外協力隊員として)



ISAPHの職員としてカムアン県に着任

ISAPH職員として村落開発と保健活動の実践

再びラオスの地でチャンスを得た私は、4年間でさまざまな成果を挙げることができました。特にラオスの文化であり、貴重な資源である食用昆虫の養殖技術を普及することを通じて、農村部の人々の生計向上と母子の栄養改善に寄与しました。養殖された食用昆虫は消費者から高い評価を受け、生産者は現金収入を得るようになっていました。住民が主体的に地域の資源を活用して、暮らしを良くしようとする姿勢が生まれています。



昆虫養殖について住民と話し合う

国際協力を活かした自治体職員としてのキャリア構築

JICA 海外協力隊を経て、日本の自治体職員に戻った私は、国際協力の視点を取り入れた地域づくりを意識しました。ラオスのような発展途上国から得た知見を、日本の町おこしに活かすことは、ラオスと日本の双方にとって価値があると考えたからです。学び合うことで、地域社会が共に発展し、新しいアイデアが見えてきます。

また、ラオスの農村開発に専門的な見識を持って再び従事するため、公務員として働きながら大学院に進学し、公共政策学の修士号を取得しました。そして、満を持して、ISAPHの門を叩きました。



両国の知見やアイデアが相互に行き交う

地域づくりの知見を日本にも還元

ラオスで得た知識や経験を日本にどのように活かせるか、日々模索しながら取り組んでいます。ラオスでの活動を通じて学んだ地域づくりの方法や地域の資源を活用した住民主導のアプローチは、日本の地方でも応用可能だと考えます。

国際協力と日本の地域社会への貢献の架け橋となるよう、地域の課題を紐解き、資源をもとに解決策を考案し、住民が自ら問題を解決できる関わり方を磨いていきます。取り組みを通して、ラオスでの経験を日本に還元し、両国の良好な関係を築いていくことが私の目指す道です。地域づくりの知見を共有し合い、共に成長できる未来を描いています。

ラオスからの報告

三浦職員の挑戦～スタツア成功への道～

ISAPH ラオス 三浦 夕季



スタディツアのある大学

実際に現地を訪れ、国際保健を学ぶことのできる大学があるなんて！ 学生の時から深く学ぶことができる機会があるのは、とても魅力的だと感じました。そんな志の高い3大学の学生が、ラオスを訪れてくれました！ 学生と関わるのは初めてでしたので、内心ドキドキでした。



JICA ラオス事務所訪問

タイムマネジメント

予定通りに計画を遂行することは、スタツアにおいて重要なスキルです。しかし、予定通りにいかないのがラオスの現実。そこでの対応が学生の学びに直結します。時間に身を任せ過ぎると、本当に必要な場面で時間を使うことができなくなります。残された時間を逆算しながら、何を優先するのか、先生方と相談し、限られた時間を最大限に活用していくことがカギでした。



マホソット病院訪問

ディープに（深く）学ぶ



子どもの栄養状態を評価

聞いたことを学びにつなげることも私の役割です。学生が、見て、聞いて、体験して、学ぶ過程で何を考え、何を感じ取り、どのようなことが知りたいのかを考えながら、説明や通訳を心掛けました。「だからこういうことなんだ」という発言が聞かれた時は、嬉しい瞬間でした！ 一方で課題は、学生の理解度に合わせて疑問を引き出すことでした。質問に至るまでの思考回路や背景を考察し、次回に活かしていきます。



ビレッジステイ 村の住民と食事

つど相談・調整

大学のカリキュラムやスタツアの目的、およびその目的を達成する方法に沿って、学生たちがスタツアを通して、必要な学びを得ることができるよう、引率される先生と調整しました。その結果、臨機応変な対応が可能になり、余裕のある時間でラオスの歴史や文化に触れる機会も作ることもできました。



カムアン県保健学校と交流

あいての理解

せっかく来たので、たくさんのことを経験してほしい！という気持ちがありましたが、やはり異国にいるだけで疲れますよね。さまざまなことを経験し、多くのエネルギーを使っていたと思います。何かあっても皆の前では言いだせないもの。そんな時こそ、相手を気かけ、共感・理解し、思いやる心が大切です。もっと学生の立場で考える必要があったと感じています。しかし、皆将来を担う医療者、元気に帰国しました。さすがです！



おもい

「信頼関係があったから、訪れることができた」「ラオスの生活ぶりを見て、自分の生き方や、日本の現状について考えるきっかけになった」「課題はあるが、ラオスの人々は優しい」「ラオスではNGOの支援もあり、希望を感じた」どれもとても大切な気づきです。現地に来てみないと分からない文化や価値観、現地の人々とのつながりを感じ取ることができたのは、大きな学びです！



大学の皆とISAPHの職員で

ラフな会話

学生とのお話はとても有意義な時間でした。「どこで英語を学んだのですか」「今までどんな仕事してきたのですか」と話かけてくれました。打ち解けると「将来は国際協力に携わりたい」と秘めていた思いを伝えてくれる学生もおり、今回の経験や私の体験の共有が、国際協力の仕事を考えるきっかけや、これからの目標へのヒント、励ましの言葉になっていたらとても嬉しいです。



すすむ道

初めて海外に来た学生も多く、スタツアでのラオスの経験は、視野を広げ、さまざまな分野で大きく羽ばたいていく皆さんの糧になると思います。私も、たくさん成長させていただきました。これから大変なことも、迷うこともありますが、それは間違いではありません。自分らしく頑張ってください。私も頑張ります！



聖マリア学院大学



東京科学大学



東京医科大学

の皆さま、ありがとうございました。またお待ちしております！



石川瑠菜 (インターン)
マラウイの好きなおところ：夕焼け

萩原愛美 (業務調整員)
マラウイの好きなおところ：優しい国民性

現地での「気づき」と「学び」女子トーク

マラウイで活動する萩原愛美（業務調整員・看護師）と石川瑠菜（インターン・大学生）。二人がマラウイで感じたカルチャーショックや、草の根活動の現場で得た学びについて女子トークで語ります。現地職員との関係から見てきたリアルな体験をお届けします。

一番カルチャーショックを感じたことは？

萩原：子育ての仕方に大きな違いがあります。日本に比べて、子どもが放任されている印象を受けました。親があればこれしなくても、子どもたちは自然にたくましく育っていくんだと感じます。

石川：赤ちゃんが土や草を口に入れようとしたり、調理実習で使う包丁を持って遊ぼうとしているのを見ても、お母さんが何も言わないので、私だけ焦ってしまいました。

萩原：日本では「良いお母さん」であることが求められます。買い物中に子どもが騒いでいるのをそのままにしていると「お母さんは何をしているんだ」と言われたり、逆に大声で叱ると虐待と騒がれたり……親が良い親であることを強いられている気がします。マラウイのようにおおらかな子育ても良いのかもしれませんね。



現地職員と調理実習

ISAPHで働いて、どんな学びが得られた？

石川：現地でのインターンを通して、草の根支援活動のリアルを知ることができました。毎日村に足を運び、私たちが主導するのではなく、現地の人々が自立できるまで活動を見守るという体制が「草の根」らしいと感じます。現場に一番近い活動を学生時代に間近で見られたことは、大変貴重な経験でした。

萩原：以前は国際協力とは、自分が先頭に立って直接行動することだと思っていましたが、ISAPHでは現地職員を雇用し、日本人がサポートに徹するのが基本です。こうすることで、日本人がいなくても活動が続くやすい仕組みになっていると感じます。そのため、日本人は現地職員が働きやすい環境を整えることが求められていると日々実感しています。

現地職員と関わって、どんな印象を得た？

石川：インターンの私にも同じ目線で真摯に対応してくれる姿勢がとても嬉しいです。ガーナの病院でのインターンでは、お客さん扱いをされることが多く、現地に溶け込むのが難しかったのですが、ISAPHの職員は私を対等な仲間として迎え入れてくれます。そのおかげで、私も自然にオープンになり、積極的に関わることができています。

萩原：現地職員には自分の意見と誇りを持つ人が多く、マラウイをもっと良くしたいという熱い思いが伝わってきます。この姿勢こそがISAPHの活動を支えている力だと感じますね。

石川：ISAPHでの活動を通じ、日本とアフリカの文化の違いがあっても、同じ課題に向き合う中で信頼関係が築けると実感しました。言葉や習慣が違って、それを乗り越えて信頼を構築できるのはとても大きな学びです。

萩原：そうですね。日本では上下関係が明確ですが、ここでは「一緒に目標に向かう仲間」という意識が強く、互いに草の根活動への思いを共有できるのが大きな力になっています。

事務局からの報告



ラオス 地域母子保健プロジェクト終了報告会



JICA 海外協力隊まつり in FUKUOKA に出店



多文化共生の担い手がつながるプラットフォーム福岡（たぶプラ福岡）共催

Photo gallery



マラウイ 萩原職員と村の子どもたち



グローバルフェスタ JAPAN2024 に出展



ISAPH2023年度事業報告会開催

*Malawi, Lao PDR
and Japan*

新入職員 萩原の奮闘記 ～マラウイのお菓子編～

前回ご紹介したお土産の落花生最中は予想に反してウケが良かったです！



かく言うマラウイのお菓子は甘味はほんのり、油多め



甘～いミルクティーと合わせるのがマラウイ流です♪

1 2
3 4

例えばドーナツ(マンガシ)は油、粉、水だけで作られているので



ISAPHはおいしく、栄養のあるマンガシの調理実習もしています

そんなISAPHマンガシのライバルは...安くて味がはっきりしたお菓子たち！



村の子どもたちもジャンクなお菓子が大好きです♪

ジャンクフードが課題になっているのは、マラウイでも日本でも同じだなあと感じました。ならばジャンクフードも栄養価高く手作りしよう！とマラウイ人スタッフの発案でスナックの調理実習を行いました。スタッフの自発性や行動力にはいつも刺激されます！

編集後記

9月に新宿で行われたグローバルフェスタ JAPAN 2024に参加しました。ISAPHブースに足を運んでくださった皆様に活動紹介をする中で、話が弾むことも多々あり、キラキラした瞳で将来の夢を語る学生さんや、楽しそうにマラウイのチテンジエプロンを試着するマダムから、1日立ちっぱなしの足の疲れが吹き飛ばすような元気をもらいました。(石原)

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	浦部 大策	医療法人社団ときわ 赤羽在宅クリニック 医師
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 病院長
理事	渡部 和男	元特命全権大使
理事	足立 基	聖マリア病院 国際協力診療部 部長
理事	佐々 優子	オリエンタルコンサルタンツ グローバル 部門長
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

入会と寄付のお願い ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会・ご寄付をお待ちしております。

- 寄付** いつでも、いくらからでもお受けいたします。
- 賛助会員** 法人 年会費：30,000円 個人 年会費：3,000円

※ご入会の方にはニュースレターをお送りします。また、オンラインサロンに参加することができます。

【お支払い方法】

- クレジットカード Syncable でのお支払い
- 郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH 口座番号 00180-6-279925



特定非営利活動法人 ISAPH

【福岡事務所】

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422番地 聖マリア病院 国際事業部内 TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004 東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階 TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165 E-mail jimukyoku@isaph.jp URL https://isaph.jp/

【ISAPHニュースレター 第49号 編集スタッフ】安東 久雄／石原 潤子

社会医療法人 雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：谷口 雅彦

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422 TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115 URL http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設 (一般病院2 〈3rdG: Ver. 1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病(後)児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。